

# ごあいさつ

明治大学平和教育登戸研究所資料館は、2010年3月29日の開館以来、今日までにおよそ3万人の皆さまにご来館いただき、大学内外から多くの反響をいただいております。

このたび本資料館では、第4回企画展《本土決戦と秘密戦—その時登戸研究所は何をしていたか—》を開催することになりました。

登戸研究所は、1945（昭和20）年春以降、登戸（生田）から長野県伊那地方を中心とする地域に分散・疎開しました。これは、米軍による本土空襲とともに、同年秋以降に想定された本土決戦に備える措置でした。本企画展では以下の3点に焦点をあて、本土決戦体制下における登戸研究所の役割を検証します。

- ①本土決戦は決して「幻」だったわけではなく、現実に準備されていたことを、松代大本営を中心とする長野・群馬県地域の実地調査をもとに明らかにします。
- ②本土決戦における秘密戦の実戦部隊であり、登戸研究所とも密接な関係であった陸軍中野学校（群馬県富岡に移転）の役割の変化について検討します。
- ③本土決戦において使用する秘密戦兵器の研究・開発・生産にあっていた疎開後の登戸研究所の実態について明らかにするとともに、次第に実戦部隊である中野学校と一体化していく過程を追跡します。

本土決戦は決して「幻」ではなく、松代大本営を中心に、長野・群馬県地域に日本の最後の抗戦力が結集されようとしていました。1945年の春以降、大本営の本土決戦構想は、それまでの内陸決戦方針から水際決戦方針へと傾斜しますが、それでも総司令部である大本営は本州の最奥部に置き、そこに米軍が到達するまでに、特攻・通常戦闘・秘密戦（遊撃戦）による阻止線を幾重にも構築して「国体護持」のための最後の戦闘を継続しようとしていたのです。

今回の企画展では、秘密戦兵器の開発・製造機関であった登戸研究所の移転と移転後の活動を、新たに発掘された『大月日誌』によって明らかにすることができました。また、遊撃戦に使用するために開発された時限爆弾の起爆装置と考えられる腕時計の現物展示を行っております。これらは、今年常設展示に加わった大量の石井式濾水機濾過筒（本土決戦において細菌戦に対処する可能性が示す）とともに、今まで知られてこなかった本土決戦の実像を示す貴重な資料ですので、ぜひこの機会にご覧下さい。

2013年11月20日

明治大学平和教育登戸研究所資料館  
館長 山田 朗



# 第一章 本土決戦とは何か

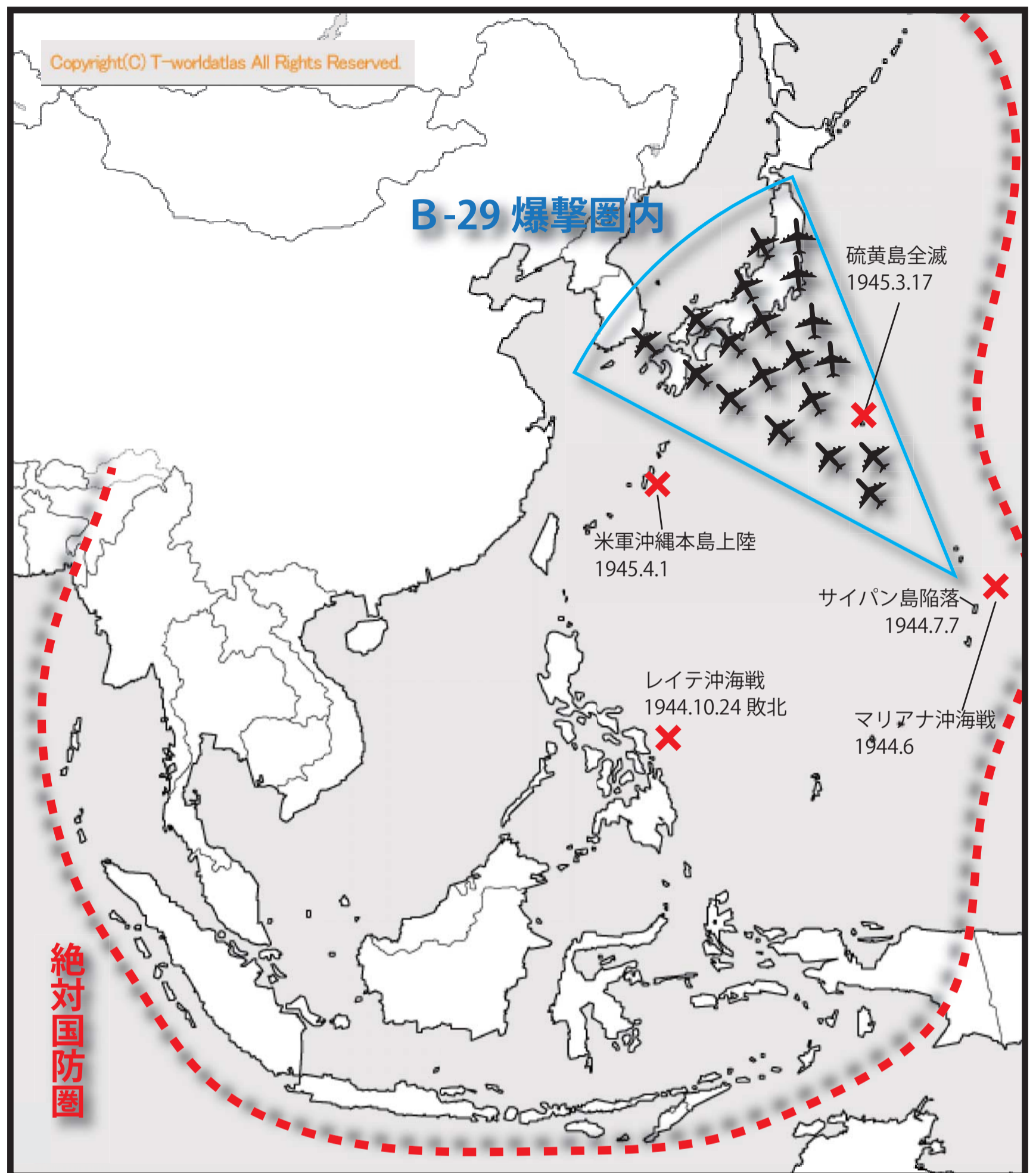
## ①戦況の悪化

1941（昭和16）年12月8日、日本軍のマレー半島上陸と真珠湾攻撃によって日本とアメリカ・イギリスの間で戦争が始まります。日本軍は、真珠湾攻撃のあと、マレー、フィリピン、シンガポールなどを次々と占領していき、一時は日本が有利かと思われました。しかし、半年後の1942年6月ミッドウェー海戦により、日本軍は戦争遂行の主導権を失います。続く8月より1943年秋までのガダルカナル島攻防戦を中心とするソロモン諸島での戦闘によって日本軍の劣勢は決定的になります。日本とアメリカには圧倒的な国力の差があったのです。

そして1944年6月のマリアナ沖海戦によって、日本海軍は多数の艦艇・航空機を失い、日本軍の敗戦は事実上決定しました。なぜならば、日本軍は航空戦力の多くを失った上に、マリアナ諸島からは日本本土大半がB-29爆撃機の行動半径に入るため、本土空襲が決定的になったからです。本土が空襲されるということは、日本の戦争遂行能力を支える軍需工業の崩壊を意味します。

この状況下、大本営は本土でも地上戦を行う事を想定せざるをえませんでした。その後、国運をかけ全戦力をつぎ込んだレイテ決戦で、日本の惨敗が決定的となったことを受け、1945年1月以降、大本営は本土決戦の本格的な準備に入っていくのです。

大本営は、米軍上陸地として第一に九州・四国方面、第二に九十九里浜もしくは相模湾を含む関東域を想定していました。この想定下、上陸せんとする米軍を阻止するため、上陸予定地沿岸部には特攻基地や陣地が構築されていきます。ここでは、明治から日本の防衛最前線であった東京湾要塞域を中心に、房総半島・三浦半島の本土決戦準備を紹介します。



1944年6月以降のアジア太平洋戦争戦況図

(山田朗『昭和天皇の軍事思想と戦略』校倉書房を基に資料館作成)

戦況が悪化していく中、日本本土への空襲を防ぐため「絶対国防圏」を設け、大本営は圏内を死守する作戦方針を持つが、サイパン島が陥落し本土の大半がB-29爆撃圏内となる。これ以降、本土内は本格的な空襲を受けることとなる。



# ②本土決戦準備 —房総半島と三浦半島

## (1) 東京湾の防衛



神奈川県横須賀市・<sup>かんのんざき</sup>観音崎第一砲台跡

1880 (明治 13) 年起工された、日本初の近代的な砲台の跡。  
東京湾要塞の一環として作られた。

三浦半島、房総半島が面している東京湾は、首都「東京」や重要拠点である横須賀軍港の入口にあたるため、防衛上非常に重要な拠点であり続けました。そのため明治期より、この地域は永久要塞「東京湾要塞」として位置付けられ、東京湾を挟んだ両半島を一つの作戦域として、砲台設置などが進められました。東京湾要塞は陸軍に属していましたが、海軍の横須賀<sup>ちんじゅふ</sup>鎮守府と共同し、侵入を凶る敵艦船を阻止すること、とくに横須賀軍港が敵に攻撃される際には<sup>えんご</sup>掩護する任務を担っていました。

## (2) 目前に迫る本土決戦

マリアナ諸島での敗戦を受け、1944 (昭和 19) 年 7 月、大本営は本土決戦を視野にいれ、本土決戦<sup>へいだん</sup>兵団である第三十六軍を編成し、関東地方および富士<sup>すその</sup>裾野に配備し有事に備えました。また同時期に、沿岸地域<sup>こっかんちくじょう</sup>に骨幹築城とこれに連繋する道路等の施設を作ることを命じます。これを受け、房総・三浦半島では、米軍が来襲する際に上陸が予想される九十九里浜、相模湾両方面において 10 月上旬より一般陣地築城が開始されます。しかし、この時点ではまだ本格的に本土決戦を想定しての準備ではなく、万が一に備えてというものでした。

本格的に本土決戦が想定され、準備がより具体的になるのは、「決戦」とされたレイテ島での戦況が悪化していく 11 月からです。大本営は最終決戦地を<sup>がいち</sup>外地 (本土以外の領土全般域) とすることをあきらめ、本土とする作戦に移行します。この情勢下、千葉県<sup>たてやま</sup>館山市の山中に築かれた海軍の抵抗拠点「128 高地」内に、「作戦室」「戦闘指揮所」地下壕が 12 月に竣工します。九十九里浜への米軍上陸後、決戦を安全に指導できるように、地下に堅牢な壕を建設したのでしょう。そしてレイテ決戦の惨敗が決定的となる 1945 年 1 月となると、初の陸海軍共同作戦となる新<sup>ていこくりくかいぐんさくせんけいかくたいこう</sup>作戦方針「帝国陸海軍作戦計画大綱」が決定されます。ここで本土決戦が決定的となり、その前哨戦<sup>ぜんしょうせん</sup>として沖縄戦が置つけられることとなりました。



「作戦室」「戦闘指揮所」地下壕内部

(撮影 NPO 法人 安房文化遺産フォーラム)

写真左手には「作戦室 昭和 19 年 12 月竣工 中島分隊」と記載された額がある。中島分隊とは、館山市にあった全国唯一の<sup>へいさせいびようせいがっこう</sup>兵器整備養成学校「洲ノ崎海軍航空隊」内に設置された分隊。

## (3) 死を強要する特攻，水際作戦へ

こうして、1945 年秋までに米軍が本土へ来襲することを前提に、決戦準備が進んでいきます。3 月の時点では、水際作戦<sup>みずぎわ</sup> (敵がまさに上陸しようとする水際で、敵を迎え撃ち、敵の戦力を弱まらせる作戦) をとったレイテ決戦の失敗より、内陸を主な抵抗陣地とする作戦 (敵の



上陸に対しては砲台などである程度は食い止め、その後、力を温存しておいた内陸に配置した兵団で敵を迎え撃つ)に変更しますが、沖縄戦敗戦後、再び大本営は急速に特攻、水際作戦へと傾きます。

房総・三浦半島を管轄する第一総軍は、このような大本営の思想の影響を強く受け、6月中旬に綱領をまとめ、7月17日に「水際に於いては徹底的攻撃作戦を実行し、総軍司令官以下は水際で戦死するという壮烈な」作戦（第一総軍参謀不破博大佐の戦後回想による）を各軍に下達します。また、この「水際」とは波打ち際も含むとし、波打ち際ぎりぎりに陣地を構築するよう命じました。これを受け、下図のように、命と引き換えに敵を攻撃する特攻基地が房総・三浦半島各地に建設され、また波打ち際ぎりぎりのところに狙撃用洞窟陣地・洞窟砲台などの洞窟陣地を構築し、来る米軍の上陸に備えようとしていました。しかし実情は、特攻基地を築いても、肝心の特攻兵器は物資不足により、基地に配備されないことも多々ありました。

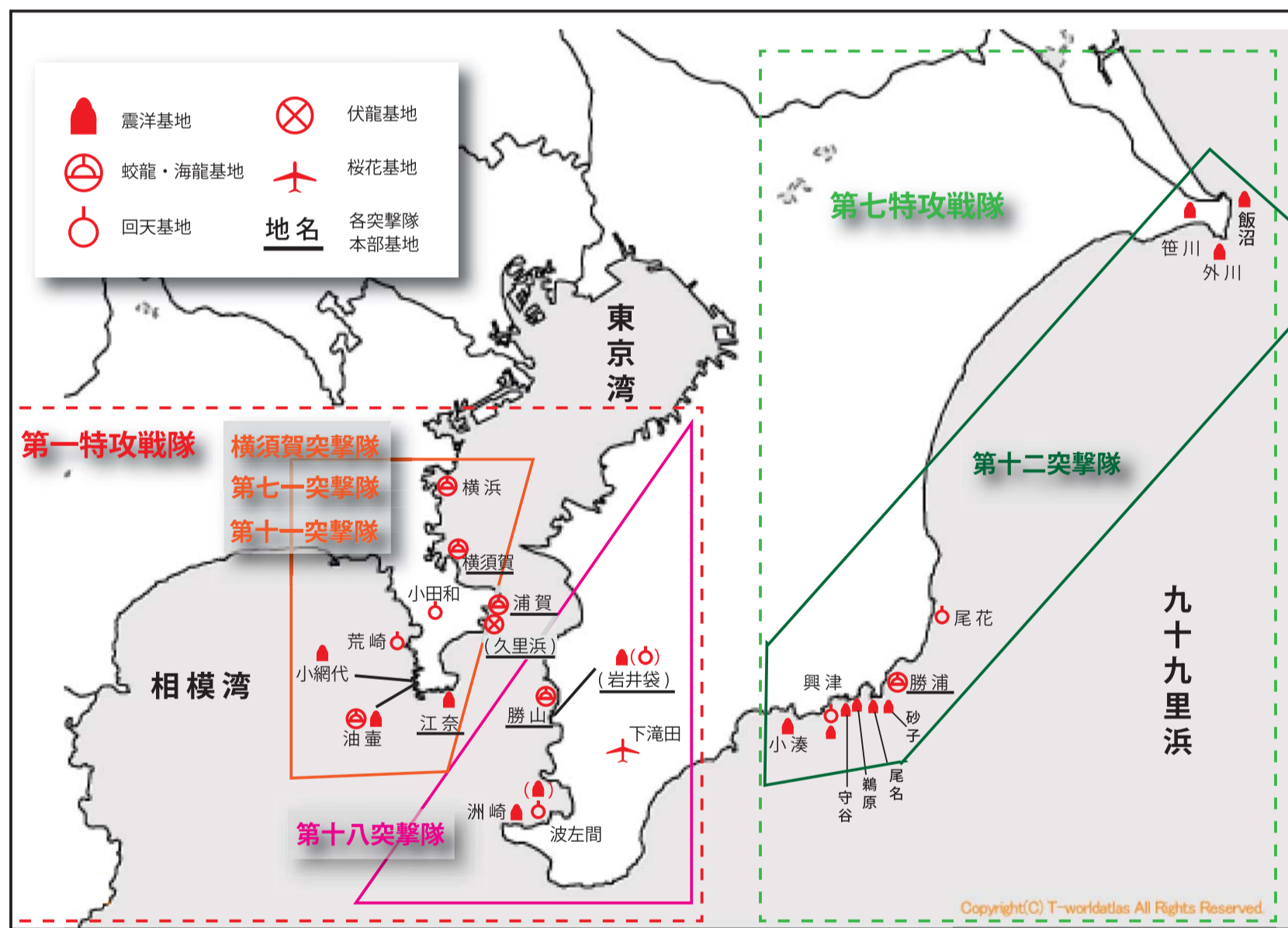
幸いなことに本土決戦を迎える前に終戦となりましたが、もし本土決戦が行われていたとしたら、私たちが今いるこの関東域は凄惨極まりない状態になったことでしょう。



神奈川県横須賀市・黒崎洞窟砲台跡  
海より上陸しようとする米軍を狙撃するため、水際に構築された。黒崎は回天基地が設置された荒崎南側に位置する。

#### 房総・三浦半島の海軍の主要な陸上及水中・水上特攻部隊配置図

(防衛庁防衛研修所戦史室・戦史叢書 93『大本営海軍部・連合艦隊(7)付図・付表 水中、水上特攻兵力配置図』(朝雲新聞社、1976年)、横須賀地方復員局『終戦時に於ける横須賀鎮守府関係参考資料』、歴史教育者協議会II編『幻ではなかった本土決戦』(高文研、1995年)、NPO 法人安房文化遺産フォーラム『あわ・がいど戦争遺跡』(2012年)、実地調査を下に資料館作成)



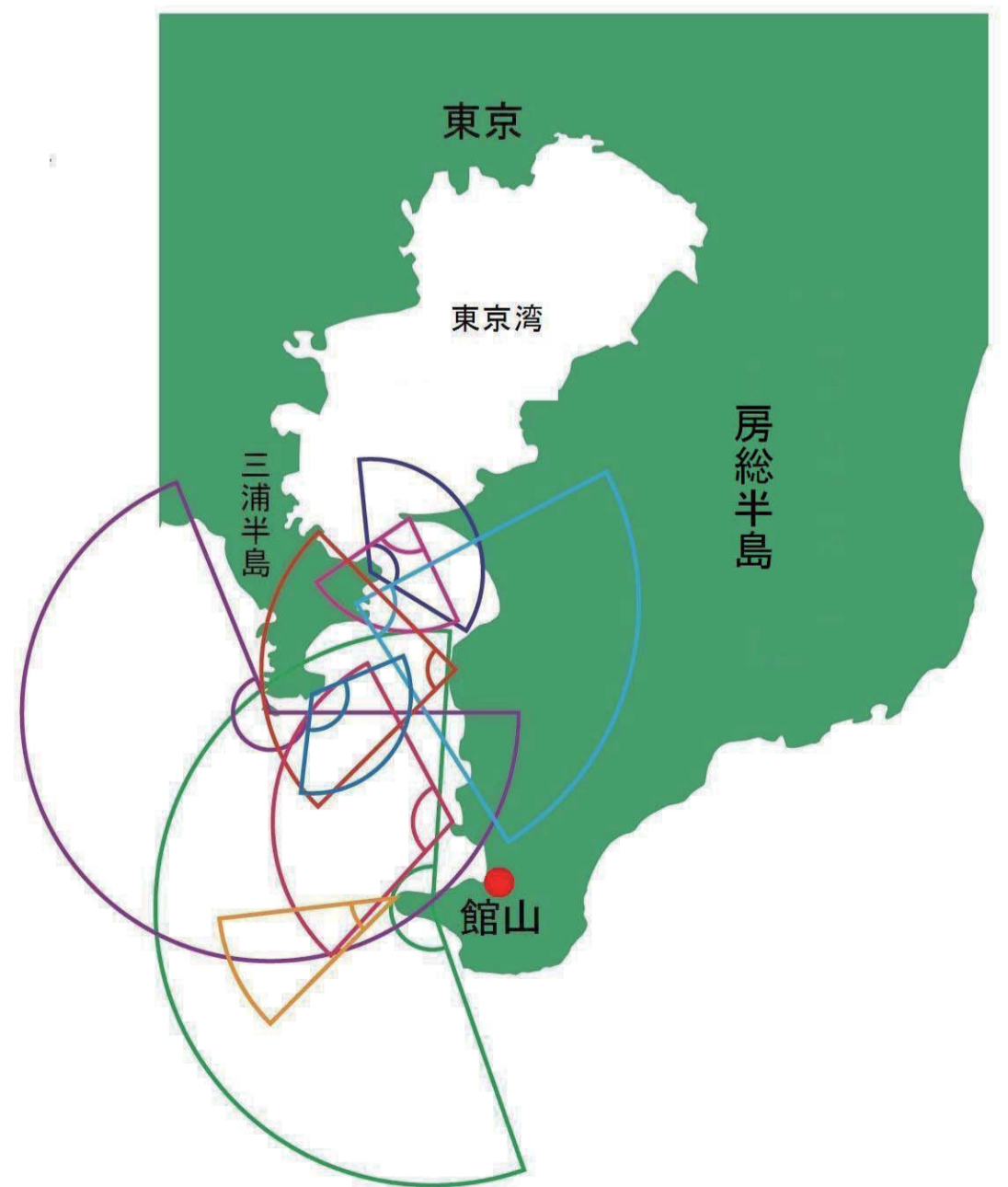
しん 震 洋	決戦用兵器として特に期待され、終戦までに約6200隻が生産された。火薬を積んだ体当たり専用のモーターボート。乗員1名、全長約5m、速力26ノット、爆薬250kgを装備して水上を走行し、敵艦艇に体当たり攻撃を加える。	こりゅう 蛟 龍	回天と類似とされる。真珠湾攻撃の際にも使用された特殊潜行艇(甲標的)を改造したもので、乗員5名。体当たり専用ではないが、魚雷2本を搭載して敵艦艇に肉薄攻撃を加える。
かい 回 天	61センチ九三式酸素魚雷を有人操縦式に改造した人間魚雷。全長約15m、重量8.3t、速力30ノット、1550kgの爆薬を装備。1人乗りで、伊号潜水艦から発射され、敵艦艇に体当たりする水中特攻兵器。	かいりゅう 海 龍	回天と類似とされる小型の潜航艇で乗員2名。魚雷2本か爆薬600キロを搭載。雷撃戦と体当たり攻撃の両方に使用できるようになっていた。
ふく 伏 龍	敵艦艇の艦底に爆雷を吸着させて爆破する人間機雷。簡易潜水衣を着た隊員が海中で棒機雷を手に持ち、敵の戦車などを積んだ上陸用舟艇を水際に爆破しようとするものであった。練習中に窒息死する事故が相次いだ。	おう 桜 花	陸上基地からカタパルトで発射、もしくは目標の近くまで一式陸上攻撃機に吊るされていき、最後はロケットに点火して目標の敵艦艇に突入・自爆する体当たり専用のロケット機。乗員1名、最大時速876km、頭部に1200kgの爆薬を装着。

第七特攻戦隊は九十九里浜、第一特攻戦隊は東京湾をそれぞれ担当し、米軍の上陸に際しては特攻を行うよう基地を築いていった。また、特攻基地と共に狙撃用洞窟陣地等が築かれ、徹底した水際作戦が図られた。

(注) 連合軍最高司令部に提出のため、第二復員局で調整されたものを基に本図を作成しているが、他の資料と異なる点がある箇所を図内( )で表記した。波左間…「米軍引渡命令書」では震洋基地としている/岩井袋…「米軍引渡命令書」では勝山ではなく岩井袋を第十八突撃隊本部基地としている。また、回天格納施設があったことも同書に記述あり/久里浜…防衛庁防衛研修所戦史室・戦史叢書93『大本営海軍部・連合艦隊(7)』(朝雲新聞社、1976年)p.385に掲載されている表「海上特攻部隊編成(二〇、八、十五)」によると久里浜を第七十一突撃隊本部基地としている。



神奈川県三浦市油壺 特攻艇格納庫跡



#### 東京湾要塞砲台の射程距離

(作成・提供 NPO 法人安房文化遺産フォーラム)

各扇形の中心にあたる部分が各砲台の設置場所。扇の大きさと角度は射程距離をあらわしている。計画上は、強固な防備で東京湾への敵の侵入を徹底的に防いでいることが見て取れる。





**江奈湾**  
 神奈川県三浦市南下浦町松輪にある江奈湾。ここには第一特攻戦隊第11突撃隊の「震洋」基地が設置された。波打ちぎりぎりの水際に基地が置かれたことがわかる。  
 2013年7月資料館撮影



**江奈湾に残る壕跡**  
 神奈川県三浦市南下浦町松輪にある江奈湾に残る壕内部。用途は不明だが、江奈には特攻艇「震洋」の基地があったため、特攻基地関連壕と推測。  
 2013年7月資料館撮影



**劔崎砲座跡**  
 神奈川県三浦市南下浦町松輪に残る砲座跡。大正期に東京湾要塞の一環で作られた。眼下に見えるのは東京湾。ここより東京湾に侵攻する敵を迎撃するため設置された。  
 2013年7月資料館撮影





おうか しもたきだ  
**「桜花」下滝田基地跡**

千葉県南房総市下滝田に残る特攻機「桜花」カタパルト（発射台）跡。沿岸に近づく敵艦船を直接攻撃することを目的に、基地が設置された。

2013年8月資料館撮影



**米占領軍本土初上陸地点**

1945（昭和20）年9月1日、米占領軍が本土において初めて上陸した地点。その後沖繩以外では唯一となる直接軍政が館山において4日間行われる。

2013年8月資料館撮影



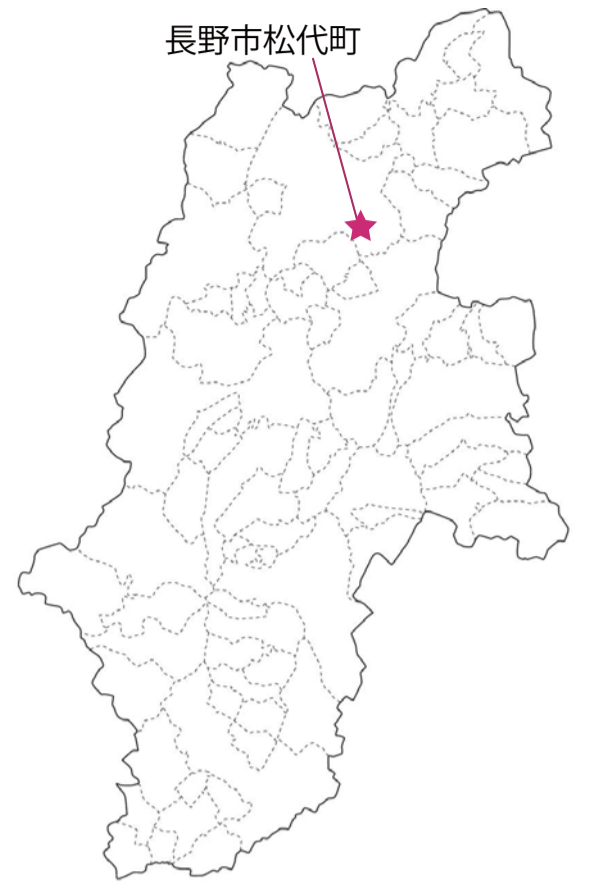
# まつしろだいほんえい ③松代大本営移転構想—死守しようとした こくたいごじ とりで 「国体護持の砦」—

沿岸部で水際作戦を展開していた頃、内陸部ではどんな計画が進められていたのでしょうか。ここでは第5展示室のパネル「大本営移転計画と長野」でも触れている、松代大本営移転計画に注目します。

1944(昭和20)年のトラック島の壊滅・マリアナ諸島陥落により絶対国防圏が崩壊、本土においての決戦が選択肢として決定されました。その年の春頃から、本土決戦論者である陸軍参謀・井田政孝少佐らにより極秘裏に大本営移転の適地探しが行われたと言われています。それは、「国体護持の砦」を築き、たとえ民衆の命を引き換えにしてでも死守しようとしたものでした。



松代盆地風景(資料館撮影)  
正面は舞鶴山。この地下に大本営移転が、また山麓に天皇の転居が計画された。



## なぜ国体護持が重要視されたのか？

国体とは既存の国のシステムであり、敗戦により国体が崩壊することは国家権力の正統性の源が失われ、時の権力者全体の失脚を意味するため、本土決戦が現実味を帯びたとき、為政者たちは「国体護持」を何よりも優先させました。

## (1) 松代が選ばれた理由

今も松代大本営跡が残る松代町は長野市内でも南に位置する小盆地にあります。歴史ある土地であり、江戸時代以降は真田家のお膝元として栄え、武家屋敷と美しい街並みが残ります。ではなぜ松代が大本営移転予定地として選ばれたのか。理由は次の5点にまとめられます。

- ①戦略的に東京から離れていて、本州のもっとも幅の広い地帯にあり、近くに飛行場がある
- ②地質的に硬い岩盤で抗弾力に富み、地下壕の掘削に適している
- ③山に囲まれた盆地にあり、工事に適する広い平地がある
- ④長野県はまだ比較的労働力が豊富である
- ⑤長野県は人情が純朴で天皇の移動にふさわしい風格、品位があり、「信州」は「神州」に通じる、防諜上も適している



上：松代町の武家屋敷  
左：長野飛行場跡地の碑  
長野市郊外にある。(共に資料館撮影)

特に④と⑤は当時の長野県の状況の軽視や神頼み的な思想ともとられますが、敗色が濃厚となり国全体が疲弊しているにもかかわらず、「国体護持」を貫きとおすため、松代への大本営移転計画はますます精力的に進められていくこととなりました。

## (2) 松代の工事の進められ方

大本営移転工事は戦局に従い、1944(昭和19)年10月から段階的に進められました。中心となった地下壕はイ・ロ・ハの各壕で、全て秘密の工事のため秘匿名と呼ばれていました。1年ほどの短期間で国の中枢(大本営、宮内庁、政府など)が収まる規模のトンネル群を完成させる予定であったため、発電所が設置されたり、306台の削岩機が集められるなど大規模な工事でした。戦時は日本人青壮年男子の働き手が徴兵、徴用のためにほとんどいなかったため、朝鮮人を中心



とした労働者が毎日約1万人ずつ動員され、12時間労働の2交代制で昼夜問わず工事が行われました。中でもイ地区の象山地下壕は最大規模で、全長5キロの碁盤の目の様な地下壕が残っています。



(国土地理院「2万5千分1地形図：信濃松代」および松代大本営保存をすすめる会編ガイドブック「松代大本営」をもとに作成)

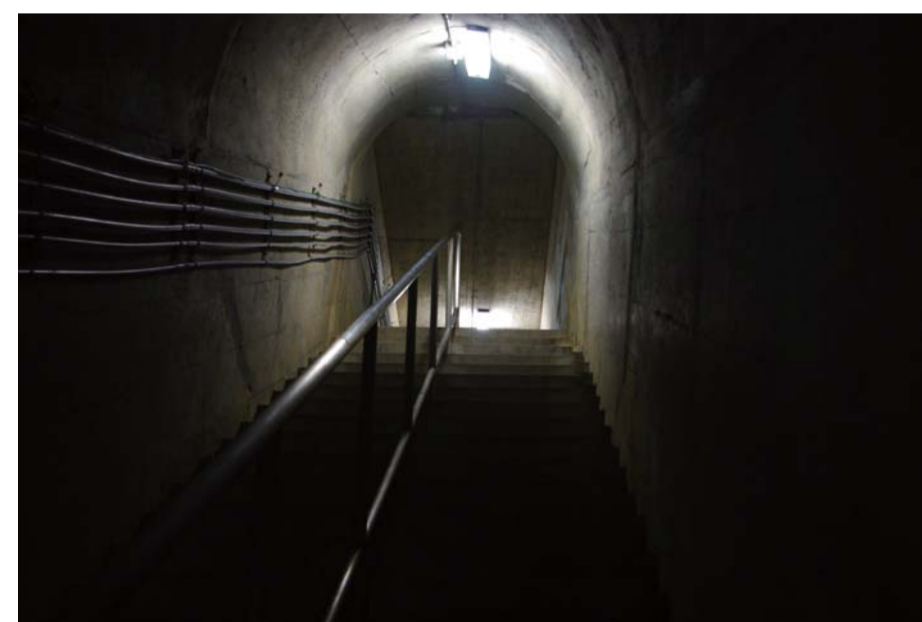
工事名	目的	工事箇所・用途	場所 (地名は当時)	面積	壕	敗戦時 完成度
マ(10.4) 工事 [1944年10月4日~]	米軍の本土空襲を避けるため、大本営を安全な場所へ移転	[イ地区]イ号倉庫：政府・NHK・中央電話局など	松代町象山	19,369㎡	20本	80%
		[口地区]口号倉庫：大本営作戦室など	西条村白鳥山(舞鶴山)	8,706㎡	5本	90%
		[ハ地区]ハ号倉庫：皇族用住居(後に食料庫)など	豊栄村皆神山	6,007㎡	6本	80%
マ(3.23) 工事 [1945年3月23日~]	必至となった「本土決戦」に備え、大本営を指揮する天皇の住居を安全な場所へ移転	[口地区]天皇・皇后・宮内省用仮皇居など	西条村筒井	3,804㎡	—	90%
マ(7.12) 工事 [1945年7月12日~]	敗戦が決定的になり「国体護持」の拠点を建設	[弘法山]賢所(三種の神器安置場所)など	西条村弘法山	通路と抗口のみ着手	—	—



松代大本営象山地下壕鳥瞰図(長野市提供)  
象山は松代最大の地下壕で全長5kmにわたる20本の壕が碁盤の目状に掘られている。

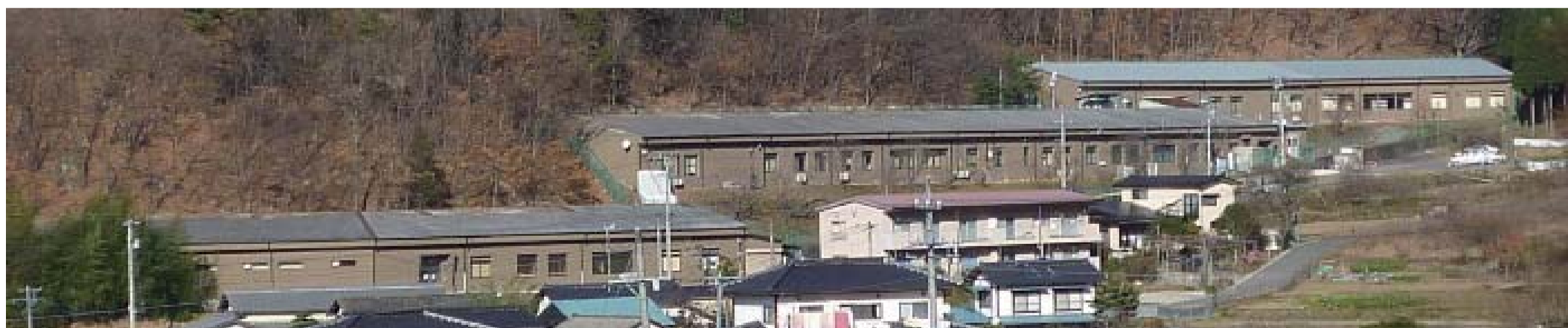
### (3) 「口号倉庫」と仮皇居—舞鶴山地下壕

松代盆地の南側、「口地区」と呼ばれた、現在は「気象庁精密地震観測室・松代地震センター」となっている舞鶴山(白鳥山)の一角は、地下に「口号倉庫」として大本営、地上の南側山麓には仮皇居が移転する計画でした。地下壕の総延長は2.6km、大抗道は幅4m、高さ2.7mのトンネルが5本からなり、地質は大変硬く大本営の作戦室として計画されました。口号倉庫も早期に工事が開始され、敗戦までに9割が完成していました。仮皇居から大本営側に伸びる小坑道や大本営作戦室として建設された大坑道は、用途からも最も重要視されているだけに、地下壕のコンクリートは1mもの厚さで一際堅牢に作られました。また地上の仮皇居の天皇御座所建設には物のない時代にかかわらず上質な材木が集められました。御座所の工事は地下の大本営のより遅く始められましたが9割完成しました。舞鶴山は今でも山に囲まれたのどかな里山ですが、防空上の観点からは空襲を受けにくく実に戦略的な配慮の上で選定された場所であることがわかります。



仮皇居から口号倉庫へ向かう小坑道(資料館撮影)空襲の際には天皇がここに避難することも想定された。

気象庁精密地震観測室庁舎全景(2009年撮影、気象庁精密地震観測室提供)奥からそれぞれ天皇居室、皇后居室、宮内省を予定して建てられた、現・1, 2, 3号の各庁舎。



### (4) 三種の神器の保管場所「賢所」—弘法山地下壕

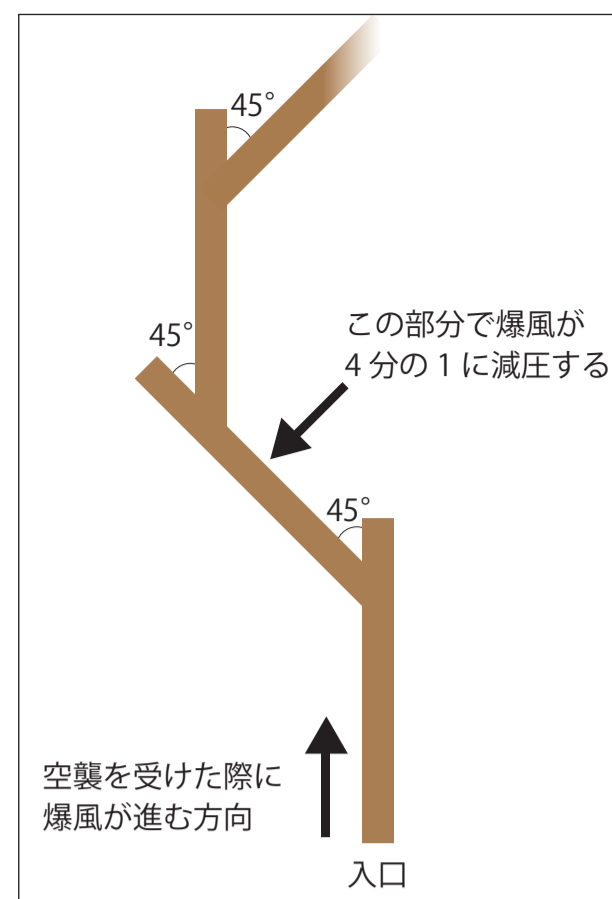
天皇の松代への動座が現実味を帯びた1944(昭和19)年7月、天皇自身に万が一のことがあっても、天皇制を維持するための象徴である「三種の神器」(鏡, 剣, 玉)は不可侵であるとの考えから、それらを安置するために仮皇居予定地の舞鶴山と伊勢神宮を結ぶ弘法山の山腹に壕を掘り、賢所の



建設が始まりました。掘削は純粋な日本人の手によるものとされ、未婚の男子に行わせました。また坑道が稲妻状（ジグザグ）に分岐した構造は、たとえ入口に爆弾が落とされたとしても奥の神殿までは爆風が届かない為のものでした。工事自体は、入口へ続く道路と坑口の切り付けを始めただけで終戦を迎えました。



上：賢所坑口とされる場所（資料館撮影）  
右：賢所坑道計画図（松代大本営保存の会提供資料をもとに資料館作成）空襲があっても奥の神殿には爆風が届かないよう、稲妻状に工夫されていた。



## (5) 松代防衛網

視点を松代の周囲にむけると、右の図から、各研究機関が疎開をすることで松代を取り囲んだことがわかります。特に群馬県内に重要施設が集められたのは、米軍が侵攻した際の関東平野から松代へのルート上にあり、松代防衛に重要なためです。このことから本土決戦体制がいかに国の中枢を守ることを重視した体制であったかが分かります。



松代防衛網図

木下健蔵『消された秘密戦研究所』「本土決戦に備え疎開した各研究機関」図（1994年）を参考に資料館作成

### 1945年時、群馬県の主な陸軍関連施設・部隊疎開状況



菊池実『近代日本の戦争遺跡研究…地域史研究の新たな視点・群馬県の事例を中心に 第5節 本土決戦その一』および同論文中「1945年の部隊等移駐・疎開状況」図（2013年）を参考に資料館作成

## (6) 松代の地下壕跡が物語ること

天皇が皇居を移す、ということは当時では大変な事でした。そのため天皇が統帥する大本営の松代への移転計画は秘密裏に進められていました。松代大本営の工事には、地下壕のほか、周辺の通信施設の建設や近接する長野飛行場の拡張等も含め、延べ約300万人もの労働者を動員したとの説もある程の大規模な工事でした。国が国として存続するための重要組織を内陸部へ移転させて松代を防衛、天皇の松代への転居まで考え、多くのコストをかけて工事を行ったことは、「国体護持」のための最後の砦を築こうとしていたことを示しています。国体とは既存の国のシステムであり、敗戦により国体が崩壊することは国家権力の正統性を失うことであり、時の権力者全体の失脚を意味するため、本土決戦が現実味を帯びたとき、「国体護持」が何よりも優先されたのです。そして忘れてはならないのは、松代の労働者の労働環境や突貫工事の進められ方から見ても、多大な民衆の犠牲の上に「国体護持」が図られたことです。

本土決戦は選択肢として確実に準備されていた—それは松代で何が準備されたかをみるだけで明らかだと言えます。



上：コンプレッサー台座跡  
大規模な工事であったことを物語る。今も松代の各地区に放置されたまま。  
右：口号倉庫大坑道反対側坑口（共に資料館撮影）





# 第一章 本土決戦とは何か ③松代大本営移転構想



## 象山より望む松代盆地

松代盆地は古墳時代から人々の生活が営まれ、江戸時代には真田家のお膝元として栄えた。左が皆神山、右が舞鶴山。

2013年6月資料館撮影



## 象山地下壕

松代大本営跡「イ地区」にある象山地下壕内部。政府などが入る予定だったが、「ロ地区」の坑道と比較すると岩肌が露出し、岩盤もろい。トロツコの枕木があったところに凹みが残っている。

2013年6月資料館撮影

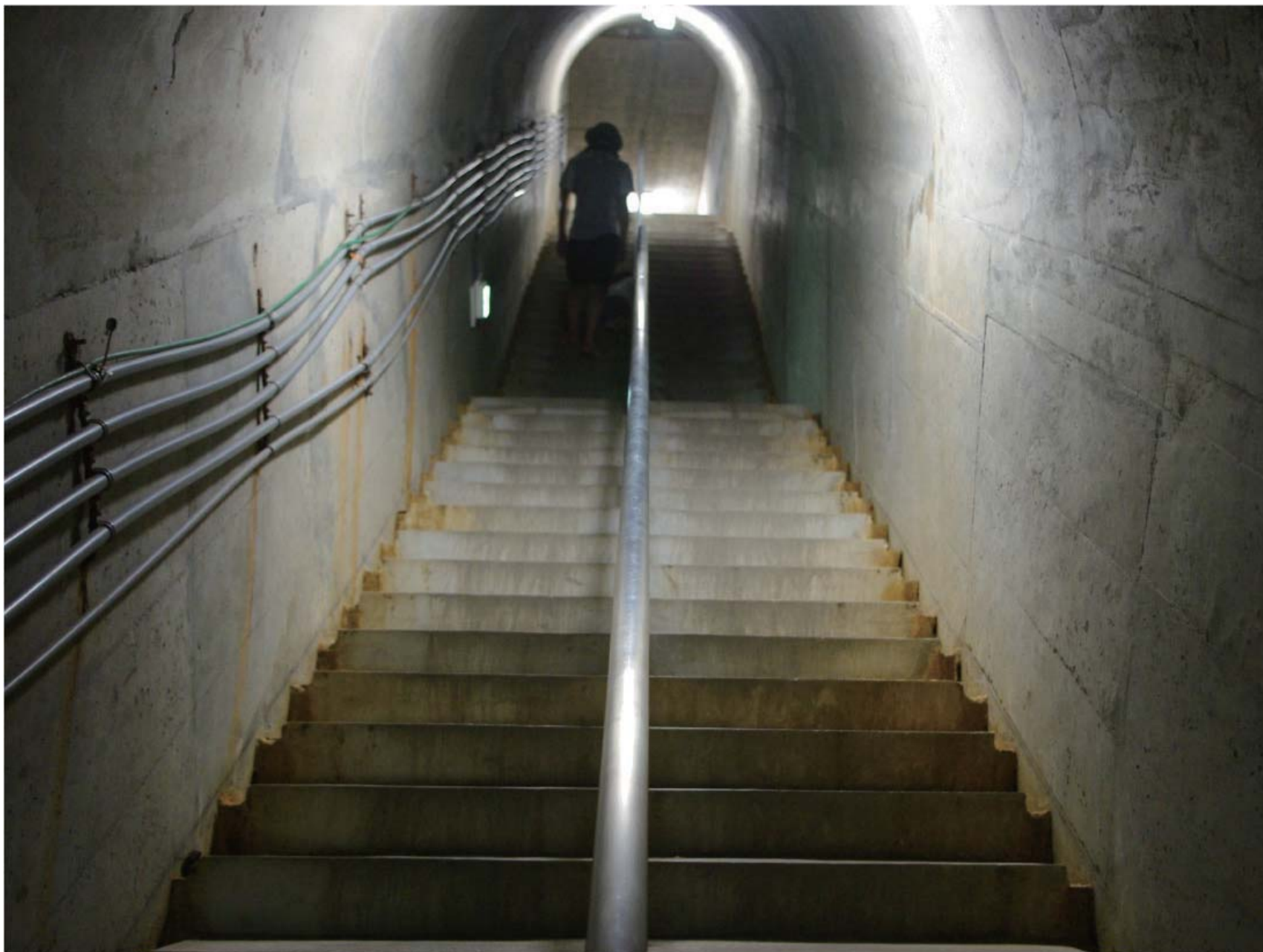


## 朝鮮人犠牲者追悼平和祈念碑

象山地下壕の入り口付近に建てられた碑。松代の工事の過酷な労働環境や発破時の事故などで犠牲になった朝鮮人労働者数は諸説あるが、聞き取り調査などによると最低でも数10人、多い説では5～600人が亡くなったとも言われている。

2013年6月資料館撮影





### 仮皇居から延びる小坑道

「口地区」天皇の居室から続く小坑道。地震観測所庁舎となっても一部一般公開されている。繋がってはいないが、大本営移転が計画された大坑道の方へ向かって延びている。

2013年6月資料館撮影

### 「口号倉庫」大坑道入口跡

現在は「口地区」の施設は主に気象庁地震観測所となっている。地震観測施設となっている大坑道には大本営が入り、奥には作戦室が設置される予定だった。入口からも大変強固な造りであることがわかる。

2013年6月資料館撮影



### かわや みなかみやま 厠跡 (皆神山)

「ハ地区」にある大本営完成後に使用される予定だった厠（トイレ）の跡。今でも地下壕周辺の各地区に数多く残っている。工事の作業員が使用することはできなかった。

2013年6月資料館撮影



# ④南関東と長野周辺における主な本土決戦 関連遺跡

